

人事異動に伴う病院図書館の業務引継

－病院図書館業務の特性を考える－

前田 元也

VZE04746@nifty.he.jp

1. はじめに

現在、病院図書館の多くは一人ライブラリアンであることに加えて、図書館業務そのものに高い専門性が求められている。そのため担当司書の力量がそのまま図書館機能に反映されその部分が利用者に評価されているといっても過言ではない。

今回、図書館業務を引き継ぐにあたり改めて「病院図書室業務」という実務を見つめなおす機会を得ることができた。そこで、当図書館業務の引継を紹介する中で、今後も現役で図書館業務を遂行していかれる病院図書館員の方々にも参考になればと考え「病院図書館業務」そのものについて少し掘り下げて考察してみることにした。

2. 病院図書館業務の特性

どの分野の職業にも「仕事」としての共通する基本的な原則が存在する。それは①認識する②判断する③分析する④評価する⑤企画する⑥実行するというプロセスである¹⁾。

病院図書館でいえば、まず自分のいる図書館の状況をよく認識すること。そして、利用者のニーズに応じてどのようなサービスを実施し何を業務に取り入れていけばよいかを判断すること。また、ともすると日常のルーチンワークに埋没してしまい、図書館業務全体を見失いがちになりやすいので、図書館業務全体の中で、現在行っている業務はどのくら

いの効果を挙げているかなどを可能な限り詳細に分析し評価すること。そして、どのような手段を講じれば、より望ましいものが実現できるかを企画して、実行することが必要である。

今回、図書館業務を引き継ぐにあたり、個々の業務について、できるだけ詳細に至るまで記載した「図書室業務引継マニュアル」を作成した(表1)。しかし、マニュアルだけでは引継ができない業務も現実に存在している。むしろその業務の方が図書館機能を左右する大きなウエイトを占めているといつてよい。その要素をいかに引き継ぐかが、引継による図書館機能の後退を防ぎ、現状の機能を維持し発展させていく必要な部分であることを痛感させられた。

すなわち、前述したこの基本的原則に反映させるために必要な専門的な部分(病院図書館員に必要な専門的な知識と技術)がそれにあたる。このあたりを掘り下げることによって「病院図書館業務」の特性についてアプローチしていきたい。

3. 当図書館機能の紹介

ここではその主題を深めるために当図書館の主なサービス内容について紹介する。

図書館は、担当者(司書)が1名。受入タイトル数は175タイトルで、主な図書館サービスは表2の通りである。特にレファレンス業務と文献複写サービスは、年々増加の傾向にある(図1)。

まえだ もとや：西淀病院図書館

表1 「図書室業務引継マニュアル」目次

目次	
1 p	1ヶ月の主な流れ
2 p	1年の流れ
3 p	レファレンス 文献検索/事項調査
6 p	図書委員会の運営
10 p	／継続購入図書について
12 p	／基本図書の見直し
13 p	／本の廃棄について
14 p	相互貸借 (西院→他法人)
	相互貸借 (他法人→西院)
22 p	広報活動
	(図書室だより 新刊書案内 ニューメディア媒体のデモ)
24 p	オリエンテーションの実施
26 p	個人図書購入制度
	(注文→受入→本人に引き渡し→料金支払)
30 p	単行書/受入・分類・配本
31 p	貸出/返却サービス
32 p	ビデオの閲覧
34 p	定期購読雑誌/受入
35 p	定期購読雑誌/分類(特集記事)
36 p	定期購読雑誌/コンテンツサービス
38 p	延滞通知の発行
39 p	製本 移動/台帳記入/バックナンバー総索引の作成
41 p	雑誌所蔵目録の作成
42 p	法規追録
43 p	図書室利用記録
44 p	あおぞら文庫(患者向け医学書サービス)
45 p	患者向け一般書の配本(4階~6階)
46 p	老健施設よどの里の図書購入
47 p	会計上の作業 買掛金の処理とその他の処理
48 p	オンライン検索の料金管理
49 p	図書費の管理
50 p	月別支払明細書
51 p	納品書について
52 p	その他ファイルしているもの
53 p	専門的な知識と技術を身につけるために
	職能団体への積極的参加
	近畿病院図書室協議会への参加
54 p	専門誌の紹介

表2 主な図書館サービス

- ・レファレンスサービス(文献検索, 事項調査)
 - 文献検索 [医中誌CD-ROM, J-MED, MEDLINE他]
 - 事項調査 [所蔵資料及びインターネット上から]
- ・文献複写サービス(相互貸借)
- ・コンテンツサービス(配布, 掲示)
- ・貸出(単行書, 雑誌, ビデオ, CD-ROM)
- ・広報(図書室だより, 新刊案内)
- ・個人図書購入制度
- ・患者向け図書の受入と配本

代行検索及び調査によせられる依頼は、利用者が何らかの理由で検索することができずに、依頼される場合も含まれるが、最近では自らがまず検索をしてその結果に納得がいかず、図書館に依頼してくるケースが増えてきているように感じる。これらの依頼はかなりの難易度のものが多く、図書館員としての力量が求められる。

レファレンス/文献複写サービス(推移)

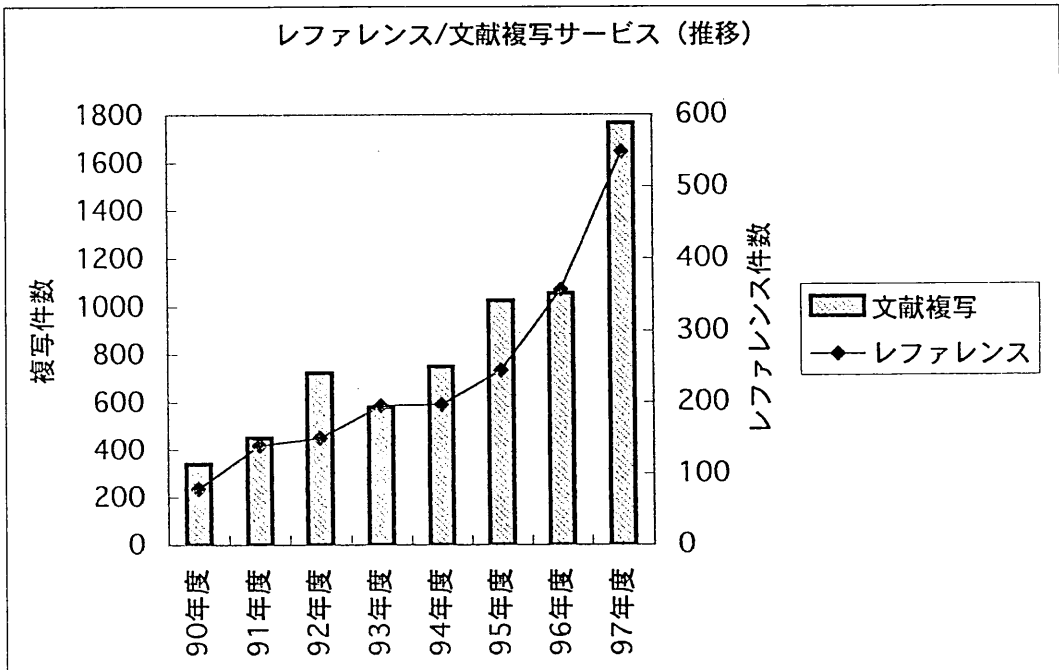


図3

4. 引継の獲得目標と二つの引継方法について

引継期間は1ヶ月間。決して十分な期間とはいえない。また、引継の獲得目標は「現在、図書館で行っている各種サービスをすべて継続させるために必要な引継を行うこと」とした。かなり欲張った内容なのかもしれないが、利用者のサービス継続を求める声も大きかったことや、後任者の理解と意欲とも重なり実現することができた。

引継ぎは、次の二つの形式で進められた。一つは自主的な学習会と、もう一つは業務時間内に行う1ヶ月間の実務引継である。

学習会はいくまでも自主的なもので、業務時間外に、土曜日の午後からも利用して1回の開催に4～5時間程度。これまでに30回開催した。また、1ヶ月間かけて行う引継は「図書室業務引継マニュアル」をもとに主に事務的な引継を行い、学習会で得た知識を活かすため、実践でのレファレンスサービス、分類、目録の作成などを中心に行った。

5. 自主的な学習会

(1) 医学文献／医学雑誌について

まず、基本的なこととして、文献とは何か、また文献が果たしている役割について、利用者はその文献をいったいどのように利用しているのかという文献についての総論と、その文献が年々増加していることと図書館の果たす役割について説明した。

また、実際に図書館業務を遂行するために文献の構成（タイトル、著者表示、抄録、著者の所属機関表示、本文の構成、参考文献表示など）を理解しておくことは最低条件といえる。特に、参考文献の表示とその読み方などについて説明した。その他、必要と思われることとしてISSNやインパクト・ファクターについても簡単に触れた。

(2) 単行本について

単行本については、その基本的な知識に加えて、医学書の特質（改版が頻繁に行われる、対象が医療従事者であることなど）、各分野

の基本図書の紹介と専門雑誌との違いについて説明した。また単行本の構成（表紙、標題紙、序文、目次、本文、索引、奥付など）については分類や目録作成に必要な項目であることから詳しく紹介した。その他、主な出版流通ルートや、ISBNについても説明している。

(3) 分類について

分類については、図書館はなぜ資料を分類するのかという基本的な概念に始まり、実際に分類するにあたっての主題把握のポイント、NLMCとNDCについての簡単に説明を行った後、当院図書館では、NLMC（一部NDC）にて、単行本と雑誌の特集記事を分類し管理しているため、実際にその演習も行った。

(4) 目録について

目録の果たす役割について説明し、目録の構成と記述について紹介した。また、当院では、コンピュータによって目録を作成して管理している。演習としてそのシステムを利用して、実際に目録を作成してみた。

(5) 二次資料について

利用者が一次資料の専門家であるなら、司書は二次資料の専門家でなければならない。ここでは、その中でも病院図書館でもよく利用する二次資料について紹介した。

海外文献では冊子体であるIndex Medicusについて、またその電子媒体であるMEDLINEについての説明と、シソーラスはMeSHを中心に説明を行った。具体的にMEDLINEの検索実習をMeSHを利用して行った。

国内文献では、医学中央雑誌の月刊誌と年間累積版（冊子体）と医中誌のシソーラスを紹介した。また、医中誌CD-ROMの検索演習では、具体的にシソーラス用語を用いたエクスプロード検索や前方一致検索など、検索のノウハウについて説明した。

また、同じく国内医学文献のデータベースであるJICST・医中誌国内文献ファイル（J-MED）については、シソーラスの見方、および、J-MEDの検索演習（キーワードの設定、演算式のたて方、各種コマンドの使い方な

ど)をおこなった。

(6) インターネットについて

図書館では、業務に関する内容であれば、いつでもインターネットが利用できるようにパソコンを利用者に開放している。図書館がそのような環境にあることから、担当する司書はインターネットに関する基本的な知識が必要となる。また、図書館にあることで、このインターネットを病院図書館員の検索ツールとして扱うことができる。

そのために、インターネットに関する基本的な知識と、よく利用するホームページの紹介(具体的には folio にリンクしているホームページを中心に)。その他、検索エンジンの使い方などについても紹介し、実際にいくつかの検索調査を行った。

(7) コンピュータリテラシー

コンピュータに関することは、基礎知識に加えて、図書室で使用している主なソフトの特徴や使い方について紹介した。

6. 引継を行うにあたっての二つの障害

これまで紹介してきた引継を実践していく過程で、引継をおこなう上での障害がしだいに明らかになってきた。今回の引継の目標を達成するためには、次に挙げるふたつの障害がある。

1点めは、一人ライブラリアンであること。その結果、担当司書の力量がそのまま図書館サービスに反映してしまう。また、利用者との信頼関係の確立するという点でいえば、本来ならば図書館全体に対する信頼でなければならぬところが、担当司書個人の力量を信頼して依頼するという側面が強くなってしまっていることである。また、図書館業務のすべてを一人で運営管理しなければならないという現実もあり、引継を行うにあたっては広範囲な引継を行う必要がある。利用者からも後任者には前任者と同じレベルを要求するであろうし、後任者は精神的な負担を負うことになってしまう。

2点めは、専門性の高い職種であることで

ある。これらの専門性を後任者が身につける努力なしに十分な引継はできない。病院図書館員の専門性は、図書館学と、医学知識、コンピュータリテラシーという3つの要素の接点にあるといわれているが、先ほども紹介した学習会の内容も、この点を考慮に入れて企画し開催してきた。また、今回作成した「図書室引継マニュアル」も自主的な学習会で得られた知識と技術が根底にあってはじめて「図書室引継マニュアル」を深められるものだと確信している。

7. 二つの障害を乗り越えるために

先ほどは引継という側面からのアプローチであったため、障害という表現を使用した。これらは本来、病院図書館機能を発揮させるためには、当然のことであり障害というマイナス的要因としてとらえるものではない。

どの病院図書館においても、いずれ引継を行うことは避けられない。そのために、図書館機能が後退したり、病院図書館全体の活動に支障をきたしてしまうことがないように方法を、今から正面に据えて考えていく必要がある。

(1) 一人ライブラリアン

① 複数配置の検討

実際に複数配置されている図書館もあることから、あきらめずに複数配置の検討、利用者の理解と協力を求めながら、病院幹部への働きかけを各病院の実情にあわせた方法で粘り強くおこなっていくことが必要であろう。担当司書がこの点で消極的であるなら展望はなかなか見えてこない。

② 医療情報室の展望

診療情報管理士やコンピュータのSEなどと我々司書がチームを編成して、情報を収集し分析・加工して、臨床に役立つ情報を提供するなど、新たな図書館像(総合的な医療情報室)の模索をすることも一つの方法かもしれない。

③ 引継期間の保障

引継期間の十分な保障(一定期間、前任者

と後任者が共に業務ができる環境) について粘り強く働きかけることも必要である。そして、後任には司書資格者を配置することは最低条件といえる。今回の学習会の内容でも明かなように、図書館学の占める割合は極めて大きい。

④法人を越えた連携体制

法人を越えた図書館機能システムの確立として、1病院では解決できない場合、同じ設置主体別での組織的なシステムの構築に向けての取り組みもひとつの方法と考える。当院も加盟している全日本民主医療機関連合会でも、図書館や司書について、次のようなことが求められつつある。その文章の一部を紹介すると「診療管理や図書のような医療情報部門は、麻酔医、病理医の配置とともに、医療の質、安全性を保障する部門として、小規模施設を含めて、本部機能の連携を築き改善が求められる」²⁾とある。

⑤行政的誘導

この問題は病院内だけの論議では解決できない内容であることも事実である。とりわけ今日のように医療情勢がきびしい昨今においてはなおさらである。病院図書館活動を保障する行政的誘導が不可欠であり、そのために行政への働きかけも必要であろう。

(2) 専門職としての図書館員

もう一点の専門性の高い職種であることに

ついては、特に研修会や各種事業へ積極的に参加することや、自主的な学習、研究活動、研究会への発表、専門誌への投稿などの努力が必要である。しかし、個人の努力のみにゆだねるだけではなく、専門職制度確立に向けた働きかけを行い、専門職としての教育カリキュラムを確立して、病院図書館員全体の引き上げをはかっていくことも同時に大切な課題といえるだろう。

8. おわりに

一人ライブラリアンから複数配置になれば、それだけでサービス内容は飛躍的に前進するであろうし、互いに学び合うこともできる。

今後の課題でもあげた、一人ライブラリアンであることから体制的な保障を確立していくことは、言い換えれば病院図書館員の専門的分野をいかに業務の基本的な原則に反映させるのかということの体制的な保障の裏付けともいえる。

【参考文献】

- 1) 長谷川湧子：病院図書室業務の考え方、病院図書室、12(3):73-75、1992
- 2) 村口至：全日本民医連「医療活動調査」は何を明らかにしたか・地域医療活動、施設、民主的集団医療、民医連医療(291):67-73、1996